わたしの「現代国語」教室（二）

――『こゝろ』を読む――

加藤宏文

はじめに

『こゝろ』が朝日新聞に連載し始められてから五日目、大正三年三月二十四日付けの漱石の書簡に、興味深いつぎの一通がある。

あの「心」といふ小説のなかにある先生といふ人はもう死んでしまひました、名前はありますがあなたが覚えても役に立たない人です。あなたは小学の六年でよくあんなものをよみますね、あれは子供がよんでためになるものぢゃありませんからおよしなさい、あなたは私の住所をだれに聞きましたか、（注1）

漱石は、前日の二十三日に、上の四節で、「先生」の「死」をはじめて予告した。それに接していない少年の興味は、素朴である。にもかかわらず、否、だからこそか、漱石の語りかけは、慈しみ深くかつ悲しい。（注2）

わたしたちは、同じ「およしなさい」を耳にしながらも、そこにある深々とした漱石の悲しみの世界に、参与しなければならない。

一　計画とねらい

以下は、この三学期、二年A組での『こゝろ』の読み合いからの報告である。（使用教科書は、筑摩版「現代国語2」。）

〈授業計画〉一三時間（①～⑬）

① 教科書所収分の通読（前半範読、後半黙読）と、そこでの問題点の記録、および、冬休みの課題・『こゝろ』読後感想文（全編対象・提出済み）のテーマとそれとの比較結果の記録の二つを、残す。

② 一限目の記録も添付された、なかまの読後感想文を熟読し、批評をつづり合う。

③ 批評された感想文が、返ってくる。熟読し、問題点を整理し、新たな段階での所感を、さらに深めて記録する。

④～⑧ 『こゝろ』下全節にわたって、わたしの発問を入り口に、読みを深めつづける。

⑨～⑫ 先学の『こゝろ』論を読み合い、新しく知ったことを記録しておく。

⑬ ふたたび、読後感想文をつづる。

この計画には、まず、実感でき、筋道を立ててそれを表現もできないわたしたちの「読み」を、確かなるものにしようというねらいがある。

わたしたちは、とかく、ひとりよがりの感想文を、義務感からのみつづったまま、その消極性・閉鎖性を相みずに、ひとつの階を登りえたかのような錯覚に、陥りつづけてきた。

(1) まず、冬休み中に全編をじっくり読んで、卒直な所感をつづるとともに、時間を置いてそれをみつめなおしてみる。反省が生れ、確信も得られ、小さな足場が築かれる。

(2) つぎに、なかまたちが、どんな所感をつづったかという興味を入り口に、努力のあとを思いやり、心を込めて、その感想文を熟読する。驚きが生まれ、感動が伝わり、また、反発や疑問も湧き出てくる。そこで、それを卒直につづって、なかまに伝え返す。

(3) さて、帰ってきた感想文には、込めて四つの記録がとじ合わされている。熟読することにより、自分の到達点が、自覚される。

(4) このように、みんなが、具体的な問題意識を持ったうえで、作品の精読に入る。受け身ではない読みの姿勢が、世界を広げる。たとえば、まったく気づかずに通り過ぎていた重要なことばにぶつかり、足場がゆらぐ。

また、誤解や曲解に思いあたらせることばにも出会って、補修をよぎなくさせられる。

あるいは、議論の焦点が浮き彫りにされ、ときには、その空転に気づき、改められる。

さらには、自論を補強したり、深めたりするのに必須の項目が整理され、固められる。

わたしたちの、紙の上での確認や議論は、ときとして、作品の具体的な表現を離れて、印象の吐露や「人間存在論」へと、ふくれあがる。

直感や、それをおしひろげる若いエネルギーは、まず大切な入り口にしたい。しかし、そこどまりの孤立した「読み」は、対話や討議を通しての稔りの豊かさには、及ばない。

わたしたちは、さきのねらいをふまえたこの「読み」の中で、それを克服したい。

(5) つぎには、そのうえで、先学の「読み」に教え導かれたい。そこで、わたしたちの問題意識は、強固なものとなり、あわせて、それを表現する力も、豊かになる。

すなわち、本格的な『こゝろ』論・漱石論に、耳を傾ける。それは、権威に追随するのではなく、その明解な思考の図式や論理、さらには、総合的な「読み」とその表現力とに学び、眼の鱗のとれる思いをする道筋である。

(6) 三月にわたる『こゝろ』の読み合いは、わたしたちに、はたして、実感できるだけの深まりを覚えさせるに至ったかどうか、それを確認する。そこでは、第二学年のしめくくりとしての、本腰を入れて書き残そうという、真摯な態度が、生まれてほしいものである。

一回目にくらべて、手もとには、自他さまざまな「読み」の足跡がある。それらを、どう整理し切るか。ひとふんばり、ここでもうひとつ、大きな鱗がとれるようでありたい。

すべてのねらいは、ここに集約される。

二　批評し合う

さて、新年の始業の日、二年A組の四十五人は、冬休みの課題に、こう応えてきた。

〈作品全体からうける印象〉（紹介略）（注3）

◎　全般的に、深刻なショックを受け、暗く否定的な反応が主流をなしてはいるが、他面、ひきつけられ、迫ろうとする姿勢もある。

＜人間について考えたこと＞（紹介略）

◎　「先生」の「エゴイズム」（注10）を中心に、自らへもひきつけての、「恐怖」・「悲しみ」・「やりきれなさ」・反発と、ここにも、否定的側面からのとらえ方が、目立っている。

＜「先生」について＞

○かわいそう　○不満　○妻を残して死ぬのはエゴ　○人間の存在悪こそが真実だのに、「先生」はそれを悪とした。　○「先生」の罪悪感がわからない　○死は不可解で馬鹿気ている　○奥さんに話すべし　○潔白ゆえの弱さ　○自殺は現実逃避　○死因は友人への謝罪と自信の否定・罪意識　○「先生」は叔父と同じか　○「策略」は悪いとは思わない　○その非社交的な生き方に一種のあこがれを持つ　○自分も「先生」のように信用できる人がいない　○「先生」は心がず太い、後悔してもこうなるのはあたりまえ　○「先生」の心の核に良心が残っていてうれしかった　○「先生」は寄生虫にうち勝ち、同時に自己をなくし、人間のままで死んだ　○エゴが良心を越えた　○心に対して素直な人　○「痛み」は利己心プラス良心・誠実さ　○人間性を追求し切った人　○人間不信に満ちた生涯で(1)お嬢さんを愛したこと(2)「私」が「先生」を理解しようとしたことは、救いだ　○自責の念のあまりにも強い人　○心のやさしい人　○「先生」の存在そのものが罪なのか　○親友の死によりエゴに気づいた　○すべての人間を疑いつづけてきた　○遺書を見る「先生」は殺人犯　○自尊心と人間不信により追いつめられた　○自分も含めて人間が許せなかった　○「先生」は、淋しく、せつないまでにやさしい人、それがかえって畏怖（ママ）　○人間の原罪を見てしまった　○もろく、漂泊している「先生」が好き、気の毒　○漱石は死んだ「先生」を赦していない　○憎めない　○弱くない、人間的だ　○長所が裏目となり自分の救いのために死んだ　○なぜと話し合わなかったのか　○「死んだつもりで」の生き方卑怯「K」○罪なき死に納得いかない　○「K」の死とどこがちがうのか

◎　ここでは、不満や反発の反面、「素直」、「せつないまでにやさしい」・「かわいそう」などに代表される側面の強調も目立つ。ここに、とりわけ大切な「読み」の入り口がある。

＜「K」について＞

○「先生」を苦しめるために死んだのではない　○「先生」から見た一面しか書かれていないからわからない　○お嬢さんを愛するようになって人が変った　○「覚悟」即自殺　○死因は「先生」のとはちがう　○弱い人間か強い人間か　○なぜ死んだのか、単純ではない、この小説の鍵　○その死不可解、馬鹿気ている

◎　意外に、触れた例が少ない。しかし、その死因を対象にした関心の中には、鋭く核心に迫るものもあって、注目される。（注6）

＜「私」について＞（紹介略）

◎　「K」同様少ない。しかし、「父が危篤のときなぜ帰京」・「『先生』は『私』の中に過去の自分を」などの鋭い直感もある。（注4）

＜「奥さん（お嬢さん）」について＞（紹介略）

◎　同様少ない。「先生」非難との関係で、わずかにとらえられているにすぎない。（注7）

＜「明治」・「明治の精神」について＞

○明治天皇の死によりなぜ自殺したのか　○明治の精神の終りと死とはどうして結びつくのか　○明治という時代を強く感じる　○何かにつけて明治時代と現代とのちがいを感じる　○明治の精神とは、日本の若さ・青春　○明治の精神とは何か、なぜそれに殉死したのか　○エゴを明治の精神として、死とともに葬らんとしている　○明治書生の純情と気まじめに苦笑　○明治天皇・乃木大将との関係不可解

◎　この難問題については、おしなべて、異和感や唐突さや不可解さを述べ、「読み」の入り口さえもが難関であることを示す。わがこととしても心引かれてきながら、この結末のありようにぶつかってのこれらの感想は、それゆえに、目標を明らかにしたともいえる。（注9）

では、つぎに、これらの所感が、おたがいの批評の中で、「読み」の深まりとともに、どう変ったかを、具体例で確かめてみよう。

①は、冬休みの課題・感想文の要点。②は、読みなおしての所感。③は、なかまからの批評。④は、批評を読んでの、問題点の整理・確認。

＜例A＞

①　底知れなく醜く恐ろしいものを見た。それはエゴだ。エゴゆえに「先生」は人間的だ。弱くはない。それが、父の危篤をおして帰京した「私」につらなる。（注4）

②　「先生」は、潔癖・純粋ゆえにエゴを持つ。それにひかれ、かわいそうに思う。私の中のエゴが恐ろしい。

③　「先生」は純粋ではあっても人間的ではない。甘さが許せない。チャップリンの「ライムライト」。あえてドロ沼（ママ）で生への執着を見せるほうが人間的。あなたから教えられ自論がゆらいだ。しかし、やはり。

④　読み方のちがいに驚いた。「人間のあるべき姿」と「人間らしさ」とはちがう。醜いものである。

◎　「私」への鋭い視点が消えて、自分の内面に移っている。批評は、切々と「人間」を説く。本人は、驚きつつも、変わらない。

＜例B＞

①　○人間の倫理に対する意識・罪の意識が重視されている。人間は孤独だ。○「先生」が「私」にしたわれたのは、その弱さ・エゴイズムのゆえだ。

②　「先生」が「K」の遺書を読んだときのことばに、人間の弱さ・エゴを見た。私も世間体ばかりを考えている。しかし、その反省の余地こそ価値がある。

③　主題は倫理だけではない。エゴの本質や愛の不可能性である。罪の意識だけでは自殺に至らない。「明治の精神に殉死」とある。

「私」にしたわれた理由――「私」にはわからないが、「先生」は知っていた。「先生」と同じ運命をたどる恐れのある人物だからだ。

「世間体」は、「先生」にはどうでもよいことだ。それは、「奥さん」に対してだけのものである。五十六章（ママ）参照。

④　考えさせられ、改めて読み返した。しかし「明治の精神に殉

死」は、やはりよくわからないし、「お嬢さん」だけに「体面」というものもよくわからない。

◎ ＜例A＞ と同じ視点が批判されて消え、自分をふり返るに至っている。批評は、「明治の精神」を指摘し、「私」の問題を復活させ、反論もする。本人は、考えさせられ、二つの疑問を確認して結んでいる。

＜例C＞

① ○明治という時代を強く感じ、「先生」の「罪悪感」がつかみきれない。○「先生」から見たある一面だけ。「K」は「先生」を苦しめるためではなく、別の意図で自殺。○「先生」は「私」の中に過去の自分を見た。

② ○「先生」の死因がわからない。○「遺書」からは「K」の死因はわからない。 ○醜さの中で悩むことが、最も美しい。

③ 私の考えの浅かったことがはずかしい。「K」に対しての償いをしたら人間でなくなる。罪悪感こそが人間の姿。それと「K」の死因とは、何ら関係がない。

④ ○明治の精神とは何か。○「先生」の自殺は肯定できるか。

◎ 鋭い視点を、ほぼ再確認している。批評は、卒直に耳を傾けたうえで、解答を提供している。本人は、つきつめ整理をしたうえで、さらに問いかけている。

＜例D＞

① ○人間とは何か。恐怖。○妻を残して死ぬのもエゴだ。○明治天皇や明治の精神と「先生」の死とは、どうかかわるのか。○存在悪こそが、人間の真実であるのに。

② ○人間らしくないように努める「先生」が、逆に人間らしくなる。そこが恐ろしい。○深い考えを持たない「私」の目について、これから考えたい。

③ 同感。ただ、ひとりで死ぬことにでなく、妻に過去を語らずに死んだことが、許せない。明治天皇は、当時の人々にとって、どのような存在だったのかわからない。

④ 「先生」が妻を残して死ぬことは、「先生」にとって、どういう意味なのか。明治の精神とは何か。

◎ 具体的に深まり、わがことへもひきつけている。批評は、同感し、微妙な違いから一押しする。本人は、疑問を再確認している。

＜例E＞

① 心に潜む恐ろしい寄生虫は、知らぬまに広がる。「先生」は、打ち勝つと同時に、人間のままの自分をなくした。

② 「先生」の中の、ことばで言い表わせない何かを、私は見た。それを寄生虫とよんだ。一面的であるが、実感だ。

③ たいへん共鳴した。しかし、生まれる前は純粋な白い心を持つと信じたい。「先生」が死ぬことでしか人間性をとりもどせなかったのは、残念。他に方法はなかったのか。

④ 「先生」は恋のために、「K」を自殺へ追い込んだのか。

◎ はじめの「実感」を、ひとたびはつきはなして冷静にみつめたうえで、再確認している。批評は、それによく耳を傾けたうえで反論をするが、きめ手は出しえない。本人は、具体的な他の一点から、迫りなおそうとする。

三 わたしの発問

このようにしあった批評の記録を手もとに、わたしたちは、一斉

授業の形で、わたしの発問を中心に、下「先生の遺書」全体にわたっての、問題点の吟味を始める。こう分ける。（○印数字は、下における節を示す。）

一、教科書所収以前

1　「私」に遺書を残す意味（①・②）

2　父母の死と叔父のこと（③～⑨）

3　下宿、神経の静まりと異性（⑩～⑰）

4　「K」という友人（⑱～㉒）

5　「K」を溶かす工夫（㉓～㉖）

6　嫉妬と房州旅行（㉗～㉛）

7　嫉妬と愛（㉜～㉟）

二、教科書所収分（㊱・㊲は欠く。）

1　「K」の告白と「覚悟」（㊱～㊷）

2　「私」の告白（㊸～㊺）

3　「私」の良心と「K」の死（㊻～㊽）

三、教科書所収以後、結末まで

1　「死んだ気で」（㊾～㊿）

2　「殉死」（(55)・(56)）

以下、紙数の都合で、二の3および三の1・2についての発問のみを、例として紹介する。

＜「私」の良心と「K」の死＞（㊻～㊽）

○　「K」に対する「先生」の「良心」は、(1)どのようなものとして、(2)なぜこの段階で「復活」したのか。また、ひきつづく経過の中で、(3)「手を突いて、あやまりたくなった」ときのこころをも説明しなさい。

○　そして、「良心」が「永久に復活しなかった」ことの、(1)理由と、(2)その後「いやにな」るまでの「先生」のこころの変化とを、説明しなさい。

○　「Kに対する絶えざる不安」を持ちつづけた「先生」は、(1)どういう意味で「足をすべらしたばか者」であり、「狡猾な男」であるとされ、(2)なぜ、「はさまって、また立ちすく」んだのか。

○　(1)「最後の打撃」という「先生」の表現を㋑「先生」のこころ、㋺「K」のこころの二面から、別々に説明し分け、(2)「先生」の「胸がふさがるような苦しさ」を、説明しなさい。

○　(1)「先生」は、どんな点において、「進もうかよそうかと考えて」いたのか。そして、(2)「K」の自殺を知った直後、どんな反応を示したのか。また、(3)「K」の遺書の内容から、あなたは、「K」の死因を、どのようにみてとるか。

＜「死んだ気で」＞（㊾～(54)）

○　「運命の恐ろしさを深く感じ」、「K」の自殺を「奥さん」に言ったのち、「先生」は、どんなこころから、「済みません。私が悪かったのです。……」と「懺悔」したのか。

○　「お嬢さん」や「奥さん」の涙を見て、「先生は、(1)どんな「気分」になり、(2)「お嬢さん」に対しては、どんな思いを持つに至っているのか。

○　他人から、「K」の死因を問われて、「先生」は、(1)どんな反応を示し、(2)結婚後、どんなこころでいつづけたのか。

○　「先生」の「ことによると」という「一転」への希望は、(1)どのように妨げられ、(2)「思い切って」と、どう考えてみたものの、(3)何ゆえに、「抑え付け」られたのか。

○　「書物に溺れ」てみても、「自分に愛想を尽かし」た「先生」は、「酒に魂を浸して」もみたのち、(1)どんなところになり、(2)「K」の「死因」を、どのようにみつめなおしはじめたのか。

○　「妻の母」（「奥さん」）の死後、「先生」は、どんな過程を経て、「死んだ気で生きて行こうと決心」したのか。

＜「殉死」＞（㊺・㊻）

○　「先生」は、(1)どこへ追い込められて、「自殺」を考え、(2)「妻」にどんな思いを注ぎつつ、(3)「天皇が崩御」したことを機に、どう考えるようになったのか。

○　「妻」から「殉死」ということばを聞き、「自殺する決心」をするまでには、「先生」は、(1)どんなことを考えたと言い、(2)遺書のむすびとして、「私」に、何を頼んでいるのか。

ストーリーを追っての、右のような具体的な「読み」を通して、たとえば、右に紹介した発問の範囲では、こうおさえられた。

一、「先生」の「良心」の相対的でしかないあり方を通して、人間的な敗北感や罪障感が、どのような普遍的型を示すのかが、明らかになり、漱石の避けて通らなかった「こゝろ」の事実を、推し量ることができた。

二、また、「立ちすく」む「先生」を、「K」とのそもそものかかわりからふり返り整理することによって、「先生」と「K」との類似点よりも、むしろ相違点に気づきはじめ、「K」の遺書を、紹介している「先生」という眼鏡をはずして読み直してみることが、それをさらに深めることになった。

三、さらに、特に、「K」の死とのかかわりにおいて、「先生」が、どの段階で、いつ、死を考えはじめ、いつ、そう決意したのかを、厳密におさえることが、「明治の精神」に「殉」じたことの意味を考えなおす道となった。

四、加えて、「奥さん」に対する配慮を通して、「私」と「奥さん」との、「先生」にとっての違いにも、注目することができた。

つづいて、わたしたちは、先学の討論記録（注5）に導かれて、つぎのような諸点について、二時間にわたって吟味し合い、整理・記録した。

一、「先生の遺書」というたてまえの大きなわくの中で、しかも、当の「先生」が、「簡単で、しかも直線的」な観察に基くと反省しているからには、その解釈になる「K」の死因の説明は、みつめなおすべきである。（注6）

二、「K」が、遺書で、「お嬢さん」のことを、回避したとみる場合と、そうでないとした場合とでは、どのような違いが出るのか。

三、では、こう考えてきてまとめられた「K」の死と「先生」の死とは、どこに接点を持ち、同時に、どのように無関係であるのか。

四、右の点を、さらに、先学の言う、「先生」が「K」の死に対して持つ痛みの「二重構造」、および、「K」自身が内包していた、やはり「二重構造」・「二重性」なる図式に合わせて、整理しなおしてみる。

五、そのうえで、もう一押し、「明治の精神」も、また、「自由と独立と己れとに充ちた現代」（上の十四）と、道義性・倫理性の二重構造を持つという説明の意味を考えてみる。

六、最後に、漱石自身の痛み・負い目が、郷愁を懐きつつも、無理心中をもさせるに至ったうえでの、鎮魂歌であるという説明の意味をも、考えてみる。

以上が、わたしの発問を入り口にしての、一斉授業の経過である。作品の表現に、厳しく立ちもどること、同時に「読み」の結果を図式的に表現し合うことを、中でめざした。

四　「読み」は深まったか

ここまできて、わたしたちは、もういちど、『こゝろ』についての所感を、まとめ合ってみた。つぎのようである。

＜作品全体からうける印象＞（紹介略）

◎　否定的な例はほとんどなくなり、読みの反省・感動の重さ・自己への内面化が、著しくみうけられるようになっている。

＜人間について考えたこと＞（紹介略）

◎　「恐怖」や「悲しみ」は影をひそめ、「淋しい」への注目が増え、「精一杯」生きるべきことや、「開拓」の必要が主張される。

＜「先生」について＞

○死はやはり逃避　○死因は「K」と同じ「淋しさ」・孤独　○「K」への責任からでなく自己へのつぐない　○「淋しさ」にたえきれず自己を清算　○妻に淋しさを感じて　○しかたのない死因がわかった　○「覚悟」にそもそものくいちがい　○「K」の死因を失恋と思いつづけた　○「K」との考えのレベルのちがいの悲しさの因　○「K」に自分の理想を見た　○「K」に殉死した　○死因は(1)「淋しさ」（「K」ほどではない）(2)「K」への殉死(3)「明治への精神」を愛して　○「K」を死に追いやったからとの誤解から　○「奥さん」を愛していたかどうか　○「先生」の判断はそのまま受けとれない　○誤解がすべてだ　○「K」に殉死したともいえる　○二重構造の中で「倫理的に育てられた男」・「矛盾した人間」　○苦しみを甘受すべき時代の人　○信愛する妻に理解されない淋しさから　○公的には「明治の精神」に殉死、私的には「K」と同じ「淋しさ」から　○「K」への精神的殉死　○罪悪感が死因ではない　○「淋しさ」とその責任を自覚して　○「K」とともに明治を真に生きた、落後者ではない　○私たちも狡猾で足をすべらせた者ゆえ共感をおぼえる　○「明治の精神」に、「K」に殉死　○死んでも「先生」の本質は永遠不変　○自分の悲しみ・「K」の悲しみ・「奥さん」の悲しみをひっかぶって、明治とともに葬ろうとした　○「先生」はより真の人間的崇高さを望んだ　○「K」の死因を失恋と誤解した　○「K」を正しく理解できなかった　○「K」の遺書を読みちがえていた　○「K」の存在から生きることを学んだ

◎　否定的な側面をも残しつつも、その死因を考え深めることによって、さきの「かわいそう」・「素直」などは影をひそめ、「K」や「明治の精神」の内包する二重構造に触れての、分析的な把握が、増えている。しかし、一方では、その難解さゆえに、観念的な説明をつき抜け切れず、ロうつしの表現に終っている例もあって、惜しまれ、反省もされる。

＜「K」について＞

○信愛してくれていた自分をだしぬくまでに「先生」をした罪を考え、孤独・「淋しさ」に死んだ　○愛と道との矛盾でなく、道に

おける「意志薄弱」のため　○「先生」に「淋しさ」を　○「K」中心の小説だ　○「お嬢さん」に会う前から死の決意　○「先生」の苦痛をよく理解していた　○「K」の「淋しさ」は(1)自分が「先生」を追いやった(2)精進の道をはずれて行く(3)「先生」さえも理解してくれない（注6）　○「K」の冷静さは、精進のあとをふり返ったとき、時代の中で生きられぬ実感から　○死因の「淋しさ」は強固な意志と孤独　○精進に悩む人に失恋は重くない　○高いレベルの道・精進から「覚悟」をきめた　○「K」は完成された人・それを目指す人　○「K」は「先生」の心の中に生きた　○作中、「先生」を殺すための犠牲　○「K」も明治の精神に殉死　○人間的には「先生」より上

◎　とりあげた例が、激増している。そして、特に、その死因をみつめて、その生き方そのものや「先生」とのかかわりについて、「読み」をずいぶんと深めている。随所に、高次の鋭い直感が、新しく生まれもしている。

＜「私」・「奥さん」について＞（紹介略）

◎　この二人については、取り扱いのあり方のせいで、ほとんど触れられないままに終ったことが、反省される。（注4・7）

＜「明治「・「明治の精神」について＞

○「明治の精神」つかみどころがない　○「K」と「先生」は明治の象徴　○明治の二重構造を知った　○「明治の精神」・「殉死」わからない。天皇観のちがいか　○「明治の精神」に社会性がある　○明治の精神によって皆が「淋しさ」を　○明治の精神＝若さと誤解　○明治は矛盾した革命の上に生まれた　○「死に遅れ意識」が明治との心中をさせた　○乃木大将の死が自殺になぜ直結するのか　○「明治の精神」＝「自由・独立・己」と「道義性・倫理性」の二重性　○だしぬくことも「明治の精神」　○「K」は「明治の精神」の象徴　○「明治の精神」への殉死は過渡期の宿命　○明治の精神は「淋しさ」に通じる　○「明治の精神に殉死」しなくてもと思っていたが、今や真の言葉と　○明治に対するレクイエム、よくわかった　○エゴイズムに注目しすぎ、「明治の精神」を見落していた。（注10）「K」の「覚悟」もそこに　○新旧にはさまれ矛盾に泣いた明治の悲哀　○「明治の精神」をふみつぶしても何も消えない　○「先生」の死とのかかわり大事　○新旧すさまじい時代の葛藤　○この苦悩が今の世に花を咲かせた　○「明治の精神」への殉死、なんとなく了解

◎　第一次の感想のと同質の異和感を残しながらも、『こゝろ』における右の重要な意味の確認と、その図式的な理解とは、おおむねなされるに至り、これからの漱石学習のための確かな足場を得たといえよう。

そのことは、漱石その人についての所感が激増していることにも、注目される。そこでも、一部反発を残しながらも、痛み・苦悩に理解を示し、中には、漱石が予覚していた「何かに変る一歩」を垣間見て、それを「新しい道」とする卓見を示すに至ってさえいる。

『こゝろ』は、「自殺」にという素朴な関心のみに即してみても、それだけでひきつける大きな力を持つ。しかし、読むほどに、「不透明」な部分が拡大しても行く作品である。したがって、わたしたちにとっては、あの、「およしなさい」がしきりと耳に残る

し、片や、先学の、「『こゝろ』の先生の死因は、作品そのものからは理解不能」（注8）とさえきめつける論に接すると、はたとつまる。

しかしながらも、わたしたちは、まがりなりにも、たとえば、「先生」の死因が、贖罪意識だけではありえないことを読みえたし、（注10）「K」の「覚悟」や死の意味についても、幾重もの目の鱗を落す思いを、おたがいの批評や討論や先学の教えによって、そして、何よりも、自らの「読み」の実感によって味わってきた。

そして、「私」・「奥さん」・「父」・「西洋人」が、新しい鱗の向うに、またしてもある。新たな「読み」をと思うばかりである。

おわりに

それから三月、四十五人のうちの五人は、三学年で、選択「現代国語」・「近代小説論」（自主教材）での「漱石」に再会した。明治四十一年夏発表の『夢十夜』のそれである。

○ 漱石は、過去の自分に対する負い目と同時に、明治という時代に対する負い目に追われ、未来の暗闇に進んだ。第七夜で死に向かってみたが、命がおしくなり、後悔した漱石は、私たち同様の俗人であり、それが彼の本質だ。

○ 第七夜で漱石は、どんな空虚でちっぽけな明治や自分でも、意識の中では大切にしていて、その無根拠性に苦しんだ。私は、今まで彼の内面をさぐらなかった。私も漱石のみつめ方にふれた今、自分自身のみつめ方をもう一度反省したい。

二人の「漱石その後」と言おうか。新たな「読み」は、すでに始まっているのである。

注1 岩波「漱石全集」第十五巻・続書簡集1815 兵庫県印南郡大国村（現加古川市）松尾寛一宛。

2 越智治雄氏「夏目漱石『こゝろ』㈣」（学燈社「国文学」四十四年六月号）に、明快な分析がある。

3 故、都留憲一氏「読書調査にみる漱石作品」（「国語教育研究」第二十二号）に他校からの紹介がある。

4 「私」については、越智治雄氏の、注2同㈠（同四十三年四月号）や、相原和邦氏「漱石文学における『実質の論理』」（「国語と国文学」四十七年四月号）が、それぞれ詳述している。

5 〔シンポジウム〕日本文学11「夏目漱石」（学生社）一四三頁～一四九頁。

6 「K」については、さきの越智治雄氏の一連の論のほか、平岡敏夫氏「『こゝろ』の漱石」（「文学」1974.5）が、詳述している。また、相原和邦氏「『こゝろ』の人物像」（「日本文学」1972.5）は、「仕切の襖」の意味から、鋭く分析している。

7 「奥さん」（静）についても、越智治雄氏の、注2に同じや、注6の相原和邦氏が、詳述している。

8 柄谷行人氏『畏怖する人間』（冬樹社）

9 「明治の精神」についても、右掲の越智・平岡・相原論文が、詳述している。

10 故都留憲一氏「小説教材・感想文にみる漱石作品」（「国

語教育研究」第二十三号）に、他の高校生の『こゝろ』感が、詳しく紹介されている。また、越智論文注2同㈢（同四十三年七月号）の、「『心』即エゴイズム」論批判は、『こゝろ』教材化の目標を再考させる。

（付記）

本稿は、一九七七年八月一一日の、広島大学教育部国語教育学会での発表に、加筆したものである。お励ましくださった清水文雄・野地潤家両先生、また、終始専門的な立場から資料や卓見を賜った畏友相原和邦・時子夫妻に、記して感謝の意を表わしたい。（一九七七・一一・二八記）

（大阪府立豊中高校教諭）